連載

チャレンジする Someone NEWS ～挑戦者の履歴書

第㉙回

船見 勝 氏（ZAOセンタープラザ代表）
――スキーのインストラクターとして40年超！

一般社団法人 洸楓座　代表理事　佐藤 建吉

▼環境変化の生き証人

今年も4月となり、いわゆる新年度となった。待ちに待った春であり躍動の時期、そして年度としたい。このまま、コロナも終息することを願いたい。一方、ロシアのウクライナ侵攻は、世界的な危機であり、これは早く平和的に解決してほしい。

今回、紹介するのは、蔵王温泉スキー場でスキーのインストラクターを40年以上も行っている船見勝氏である。氏を語るには、冬のスキーの季節、特に樹氷の間を滑走する醍醐味について触れないわけにはいけない。が、その長い年経過から気付くことは、地球温暖化による環境変化についてである。同氏は、スキーのメッカの蔵王で、そうした変化について経験として定点観測をしてきた生き証人でもある。

▼スキーこそが人生

船見勝氏は、筆者と高校の同級生であり、以後、「君付け」で書く。両名は、ともに山形県立鶴岡工業高校機械科へ昭和41年4月の入学で、44年3月に卒業した。機械科はA、Bの2組があり、同期卒業は93名との記録がある。同校は、いわゆる職業高校であり、その当時は、未だ大学に進学する者は少なく多くは就職した。船見君も筆者も高卒後、就職した。筆者は、千葉県の日立系の設計会社に就職し、2年後、大学に入学しその後も大学に残り定年になったが、船見君も当初は変遷の時期があったが、やはり3年後からは一貫してスキーと関わる人生を送っている。

具体的には彼は、高卒後、東京銀座のコックドールというケーキやレストランの会社に就職した。その当時から、オシャレな志向があったようだ。1年後、三井倶楽部のレストランに移り、役員たちの教えを受ける体験もしたようだ。冬季には長野県の八方尾根スキー場でスキー遊びを楽しんだという。ここでは、出会いもあり結婚し、やがて八方尾根スキー場を本業とした。その後、郷里の鶴岡に戻っていた時に、蔵王温泉スキー場でスキー教室をやっている鶴岡出身の土岐良次氏と出会い、誘われて蔵王で働くことになったという。その後は、スキー関わりの仕事を生業として、あるいは天職として過ごしてきた。話を聞くと高校生の時から関わっていたといい、今日まで55年近くがスキーとともにある。

蔵王では、スキーのインストラクターとして、同時に宿泊施設（セミナーハウス）ZAOセンタープラザの社長としての役割を担ってきた。蔵王でのスキーの仕事は冬に限られる。オフシーズンは、セミナーハウスの経営が仕事であった。

しかし、船見君の人生の中心は、雪と密接であった。その中心的な仕事は、ZAOフライツァイトシーシューレ（スキースクール、日本プロスキー教師協会認定）のインストラクターである。これは、今年で45年になるが、40周年記念の年には、表彰をうけ、その後、スキースクールの代表となり今日に至っている。

この間に新たにウインタースポーツとしてスノーボードも登場し、ZAOスノーボードスクール（日本スノーボード協会認定）の代表を30年以上行ってきた。スノーボードでは、草分け的な存在となっている。地元では、年齢とともに、指導者やマネージャーとなり、理事など企業貢献や社会貢献を行い、今日に至っている。

▼スキーのルネサンス／リバイバル

スキーの腕前もあり、インストラクターとしては、最上位のステージⅣ（4級）を取得し、現在も実際に教えている。このスキースクールでは、校長は若い人に任せているが、自身も現役のインストラクターである。スキーのマスターズにはA級（30歳～59歳）、B級（60歳以上）があり、同君はB級を指導しているという。受講生の中には90歳を超える人もいるという。

スキーは、滑降するスポーツであり、体力よりは技術が大切であり、高齢者でも冬のレジャーとしては格好のものかもしれない。筆者も子どものころには、上手なスキーヤーであったから始めたくなったが、長年のブランクがあるので夏場のトレーニングをした後であれば可能かもしれない。

以降で述べたいのは、蔵王で40年以上も定点観測してきた時代の変化である。とくに、視点としたいのは、スキーに関連する環境や状況の変化についてであり、その理由を知り、今後の状況改善に活かして欲しい。

▼スキー自体の変化

高齢者に似合うスキーという切り口には、実はスキーやシューズなどの用具の進化も関係している。従来は、スキーの上級者は長いスキー板を乗りこなせるというのがあったと思う。ゲレンデの雪の上に刺してその長さを競った。当時は、2㍍のスキー板が普通であった。しかし、いまは、その長さは1・65㍍（165㌢㍍）程度が普通になったという。同時に軽くなり板幅に、スプーンの様なカタチのくびれ（サイドカーブ）が導入され、カービングスキーと呼ばれている。

スキー板の材質も進化し、FRPサンドウィッチ構造や、カーボン繊維CFRPのスキー板が用いられている。後者はより軽量化し弾性変形を高め、かつ衝撃吸収能力を持たせた複合構造となっている。複合材料や強度設計の面は筆者もかつて研究で関わったことのある分野である。また、滑走面の材料配向に対する材料設計も進化している。こうして、筆者はスキーの商品化には関わったことはないが、なお興味深い。

上述では高齢者にフォーカスしたが、実はスキー愛好者数を増やすためには、若い男女にもスキー用具の進化は受け入れられると思われる。問題は、いまから40年以前に比べてスキー人口の減少が激しいことである。したがって、より魅力的なウインタースポーツとしてスキーやスキーボードへの興味づくりは、業界の課題である。

▼蔵王温泉スキー場の課題

筆者も若い頃はスキーで遊んだ。当時は、積雪が2㍍にもなり、ひと冬に3回も雪下ろしした。11月から4月までが雪の季節であった。したがって、この地の子どもたちは、スキーが上手になった。とくに思い出すのは、生家の屋根の上から庭先を通り、ぐるっと一周して村道まで長さ100㍍以上のゲレンデになった。

しかし、地球温暖化が進行し、里地においてのほかスキー場においても降雪量（積雪量）が減少した。はっきり言えば、雪不足である。生き証言としての船見君に聞けば、今年は例外的に大雪であり今から30年前と同じ程の積雪があったが、近年は、その当時の3分の2くらいであるという。こうした状況から次のような課題が生まれている。

Ⅰ地球温暖化による積雪量の減少。

Ⅱ＝温暖化は、着氷や成長にも悪影響を与え、樹氷の出来映えを悪化。

Ⅲ＝結果、「蔵王といえば樹氷」、「樹氷といえば蔵王」という、特徴がトーンダウン。

Ⅳ＝スキー客やスノーボード客の減少。

Ⅴ＝氷と雪が付着して樹氷をつくる針葉樹のアオモリトドマツの枯死拡大。

これらは、大きく括ると現代の①地球温暖化、②少子高齢化、地方の過疎化、都市人口集中という社会問題、また③コロナ禍も関係している。

▼解決に向けて

蔵王温泉スキー場に長く住みスキー界の功労者であった土岐良治（1925年9月～2021年12月）氏の後継者として、船見君は当地の係る問題についてチャレンジしなければならない宿命をもつ。が、荷が重い課題もある。樹氷の問題は、アオモリトドマツの夏場における対策が主となる。植林のほか、害虫のキクイムシの退治対策も必要だ。

地元の営林署と山形県は、アオモリトドマツの植林と再生も行っているという。これは、長い年数を要する対策となる。幻想的な樹氷の中を滑り降りるスキーツアーは蔵王の魅力である。その象徴的なイベントと自然と人工の両面で維持していくことが需要な責務であるといえる。地球温暖化は、厄介で大きな社会変革をつくり出すものである。

スキーの観光客の減少は、地方の人口減少、都市への集中、またレジャーの多様化が起こり、ウインタースポーツとしてスキー場への全国の出入り数は、10年間で1000万人から510万人に半減した。結果として、スキー場もピークの3分の2の700弱の場数になった。スキーの魅力づくりが必要である。その面では、海外からのインバウンド客が増えていた。その魅力づくりは、新しい景観づくりとしてその観光プロデュースが行われていた。その努力を打ち消したのはコロナ禍であり、夏冬も、インバウンド客のいなくなり、打撃を受けた。

船見君によれば、今後は、「山岳リゾート」として、国内外の来客を迎えて活気を取り戻したいとのことである。

▼温泉水や廃湯の熱エネルギー利用に期待

蔵王温泉の温泉湧出量は1日当たり8700㌧（湯温48～68度C）であるという。現在は、温泉浴と冬季の道路融雪に利用しているだけであり、強酸性の硫黄泉という湯質であるが、熱エネルギー利用は望める。これは、船見君も望んでいることであり、本紙の読者の意見や技術をご教示願いたい。

蔵王温泉スキー場には多くの課題があるものの、「蔵王」「ZAO」というブランドを活かして、地元の取組に同調共感を得て、社会的文化として持続可能を追求して欲しい。かつて、観光は「るるぶ」が合言葉であった。それは、「見る、食べる、遊ぶ」であったが、最近では、「新るるぶ」に置き換えられ、「体験する、交流する、学ぶ」が重視される。スキーのオフシーズンでは、「新るるぶ」が、必須である。

そうした一環で、2018年に、船見君のZAOセンタープラザで高校の同窓会を行ったことを思い出した。結びにあたり、船見君にあっては、新しい出会いや生き方をつくり出す切掛けや場として当地を活かすために益々の活躍を願いたい。

船見勝氏（スキーインストラクター、71歳）

ZAOフライツァイト シーシューレ（左から5人目が船見君）

蔵王の樹氷林

筆者も浴びた雪渓温泉（ZAOセンタープラザ）